

コープふくしまがガラスバッジ説明会を開催

10月6日、福島駅から徒歩3分のコラッセ福島で、コープふくしま主催のガラスバッジ説明会が開催されました。会場には、150人程の組合員と、テレビ、新聞などの報道関係者が集まりました。

ガラスバッジは、生活の中で浴びる外部被ばくの放射線量を測るための器械で、男性は胸に、女性はお腹に、衣服の上からつけるものです。コープふくしまの組合員447人は、8月の1ヵ月間、ガラスバッジを着用して生活しました。そして、その集計が出され、各組合員にガラスバッジ測定結果報告書として送られました。しかし、その結果をどう受けとめて、どのように活用すればよいかわからないという声が多かったことから、今回の説明会が開催される運びとなりました。

「開会のあいさつ」は、コープふくしま専務理事の野中俊吉氏によって行なわれ、「今回の、ガラスバッジの計測は、今後、福島の人々が元の生活に戻れるようにするための試みであり、そのために専門家の先生方に集まっていた」と述べました。

続いて、「趣旨説明」で、NPO法人放射線安全フォーラムの理事長加藤和明氏より、「ガラスバッジの測定値をもとにして、今後は除染活動と、健康の管理の両方を合わせてやっていくことが大事である」と語られました。

「報告書の見方説明」は、NPO法人放射線安全フォーラムの事務局長である福田達也氏によって行なわれました。ガラスバッジは、外部被ばくの線量を測定するもので、具体的には放射性セシウムから受けたガンマ線の量を測定しているということ。今回使用したガラスバッジは、国際的な規格に基づいた国際MRAの認定事業者である千代田テクノルが開発したものであること。実際のガラスバッジ測定結果報告書の見方、などの解説が行なわれました。

原発で働く人やレントゲンを使う医師など、職業として放射線に関わる人の線量限度は50ミリシーベルト/年※となっており、法令によってこの値を超えないように定められているといます。この数値は十分に安全性の余裕をみた値で、半世紀以上にわたって使われてきたものだそうです。そして、今回のガラスバッジによって測定された数値は、最も外部被ばくが多かった人でも、職業として放射線に関わる人の年間総量限度の10分の1程度



ガラスバッジの実物。これをケースに入れて、常に所持して計測する。



野中専務による挨拶。後ろに並ぶのが専門家の方々

の放射線量であることが報告されました。

その後、NPO法人放射線安全フォーラムの理事である多田順一郎氏によって、「ガラスバッジの測定報告書を理解するために」という解説が行なわれました。地球ができる以前から、宇宙空間には放射線があり、レントゲンの発見によって放射線が使われ始め、その後、放射線が人体に及ぼす悪影響が分かり、なるべく放射線を浴びないように活用されるようになったなど、現在に至るまでの歴史が解説されました。さらに、放射線について以下のような説明がなされました。

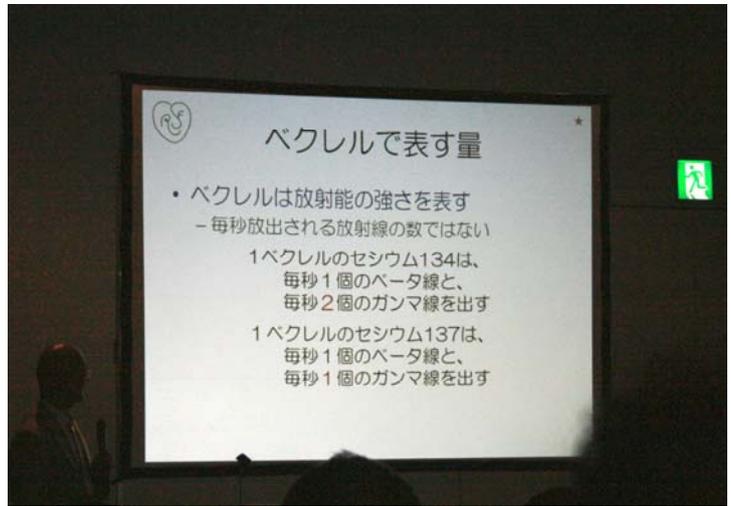
放射線の値として使われるシーベルトは、人の健康への影響の目安となる放射線の量の単位。この健康への影響は、放射線を受けてから何年も経った後、放射線が原因でがんや白血病が生

じるかもしれない影響を表している。ただし、この数値は、一度に500ミリシーベルト以上という桁違いの放射線を受けた原爆の被爆者の方々のデータをもとにして出したもの。また、がんや白血病などの影響は、放射線以上に、煙草や肥満など影響が圧倒的に多い。さらに、体の中にある組織や器官に届く放射線の量は体格などによっても異なり、DNAが傷つく確率も個人差が非常に大きいのです。

このようなことから、多田氏によって、今回のガラスバッジによる計測で年間に浴びる放射線量がわかっていても、年間何ミリシーベルト放射線をあびたらがんや白血病になる可能性が何%上がるなど、病気の予測には全く使えないということが伝えられました。

さらに、放射線は、自然界にも多く存在すると多田氏はいいます。放射能を含んだ宇宙線の影響を受けやすい標高3000mのチベットでは年間5ミリシーベルト、もともと土や岩に放射線をおびている広東省揚江県では年間6ミリシーベルトあるそうです。そこでくらす人々は、何世代にもわたって同じ場所に住み続けてきました。そして、国際機関によって調査が行なわれたが、彼らにがんや白血病が異常に増えたという結果は得られなかったと説明されました。

その後、「質疑応答」で、組合員と専門家の間で、チェルノブイリにおける甲状腺がんのこと、マスコミが過剰に騒ぎ立っていること、日常生活の中で



多田氏によって、放射能にまつわる歴史や知識の説明が行なわれた。



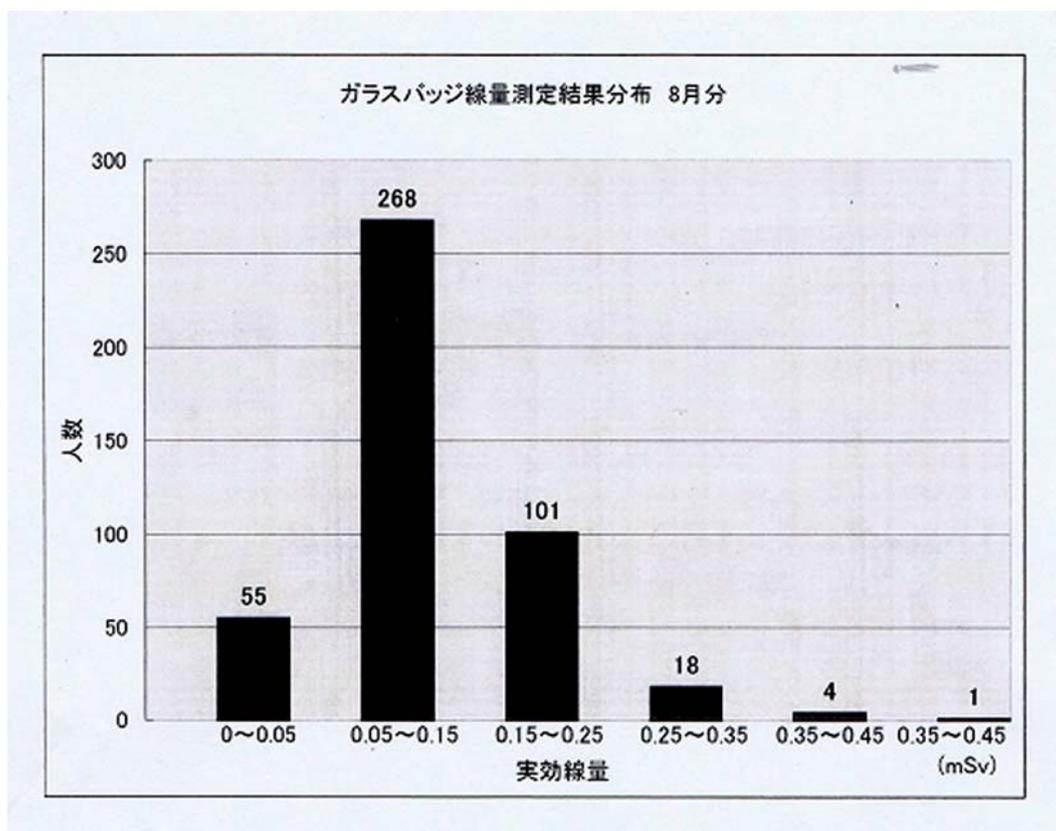
会場には多くの組合員やマスコミが集まった。

不安に感じていること、今後の除染についてのことなど、多岐にわたった放射能にまつわる質疑が活発にやりとりされました。

最後に「閉会あいさつ」がNPO法人放射線安全フォーラムの副理事長の田中俊一氏から行なわれ、説明会は滞りなく終わりました。

今回のガラスバッジによるデータを、今後の生活に向けて前向きなデータとして活用することが大切です。放射線を浴びている量が、もし多いと感じれば、自分の住んでいる環境の除染作業を進め減らしていく努力をすることも必要かもしれません。また、自分で行なうのが難しければ、自治体を動かして、除染の要請をすることも場合によっては求められます。今後、半年、1年とガラスバッジをつけ、引き続き測定が続けられていきます。その結果は、除染活動や健康管理の指標として、福島の人々が元の生活を取り戻すために、最大限活用されていくこととなります。

表1 ガラスバッジ測定結果分布



1ヵ月間であびた放射線量は、95%の組合員が0.25シーベルト以下であることがわかった。仮に0.25シーベルト×12ヵ月で計算すると、年間にあびる放射線量は3ミリシーベルトになる。1ヵ月間であびた放射線の数値が最も大きかった組合員は、0.35～0.45ミリシーベルトで1名のみだった。仮に0.45ミリシーベルト×12ヵ月で計算すると、年間にあびる放射線量は5.4ミリシーベルトになる。